

大聖堂のある街で

第10話 海辺の白い療養所で



堀田耕介

海辺の白い療養所で

ぼくたちは新市街の端にある列車駅から都市間を結ぶ急行列車に乗り、お母さんの手紙に書いてあった療養所のある街に向かっていた。

あの日えっちゃんと別れて、ぼくは走って家に帰った。お父さんは相変わらずぼうつとしてたけど、ぼくが帰ったとき、机の引き出しから何かを出して眺めていた。

「お父さん！お母さんのいる場所が分かったよ。」

お父さんは目を上げた。

「おばあちゃんのところだろ。」

「そうじゃないんだよ。今日えっちゃんに会ったんだよ。」

ぼくはえっちゃんのことを詳しく話した。そしてお母さんの手紙を渡した。お父さんは手紙を読んで、深くため息をついた。

「えっこにも、哀しい思いをさせてしまったな。」

ぼくは何と言っているか分からなかったけど、元気を出して言った。

「でも、大丈夫だよ。植物園の先生と、今は一緒に住んでるんだって。」

お父さんはびつくりした顔をした。

「あの、変わり者の先生とか？」

「うん、悩みを聞いてもらったって、すっかり晴れ晴れした顔をしてたよ。」

「そうか…」

お父さんはなんとなく思案顔をしていた。ぼくはちよつと迷ったけど、思い切って言葉を続けた。

「それにびつくりだよ、えっちゃん、子どもができた

んだって。」

お父さんはぽかんとした顔をして目をぱちぱちさせていたが、急に笑い出した。

「そうか、えつこが。」

お父さんは、笑いながら咳き込んだ。

「大丈夫？」

「大丈夫だ。」

お父さんは咳き込みながら言葉を続けた。

「本当に、あいつのことだけはどうしたらいいんだろ
う、何をしてやれるんだらうとずっと思っていたん

だ。でも余計な心配をすることはなかったな。なんだかんだ言って、自分で人生を切り開く力を持っていたんだ。」

「そうだよ。お父さんの妹だもん。」

「そうだよな。あいつにはいつもびっくりさせられる。」

「植物園の先生、ちよつと変わっているけどいい人だし、えっちゃんも幸せになれると思う。」

「そうだな。きつとうまく行く。お父さんもそう思うよ。」

お父さんも、なんだか元気が出てきたような顔をしていた。

「だから、お母さんに会いに行こうよ。」

お父さんは、ほほえみを浮かべたまま少し黙った。

「まりから何も言っていないのは、もうだめだとおもっているからなんだと思ってた。でも、えつこが手紙を隠していたとはな。」

お父さんは、手元に持っていたものをぼくに見せた。お母さんの写真だった。ぼくはベッドの、お父さ

んの横に腰掛けた。

「本当は、この一週間くらい、ずっとあいつの夢を見ていたんだ。でも向こうから言ってくるまで、こちらから会いにはいかないでおこうと思っていた。でも、こんなふうにみんなが用意してくれたのだからな。」

お父さんはぼくの顔を見た。

「明日は学校が休みだな。」

ぼくは頷いた。

「お母さんに会いに行くか。」

ぼくは大声で言った。

「もちろんだよ、お父さん！」

列車はぼくたちの街を出てからもう2時間走っていた。海辺の町にはもうすぐ着く。列車は海岸沿いを走り始めた。白い雲が浮いていて、エメラルド色の海に白い波が線のように立っている。列車はやがて、小さな駅に滑り込んだ。わずかな停車時間の中に、ぼくとお父さんはステップを降りた。

小さな駅の駅舎の前の道は、まっすぐに海に向か

つて下っていた。道の両側には棕櫚が生えていた。向こうから小さな白い車が、駅に向かって走って来た。

「あの車かな。」

白い車から、小柄な女の人降りてきた。おばあちゃんだった。

「おばあちゃん！元気だった？」

「おお、ユキちゃん。元気だったよ。ユキちゃんはどうかい？」

「元気だよ！もちろん。」

「ご無沙汰してます。」

おばあちゃんはお父さんを見て言った。

「ユウさんも大変だったんだねえ。電話で聞いて驚いたよ。せつかく名誉な仕事をもらったのに、残念だったね。」

「いえ、名誉なんて、私は本当はいいんです。」

「そうね。あなたはそういう人だったね。まりもあなただのそういうところを気に入っていたんだから。」

おばあちゃんはさっさとぼくたちの荷物をトラックに押し込むと、

「さて、行こうかい。」

と言った。ぼくたちはおばあちゃんの運転で、曲がりくねった道を走って、海辺に近い小高い丘の上にある、白い療養所へ行った。

「ここは療養所というより、別荘のようなものでね。お医者さんも常駐しているんだけど、ほとんど自分でできる人たちは自分たちで生活しているから、気楽なものなんだよ。」

療養所の正面入り口には車いすに乗った人がいて、その後ろに介添えらしき人が立っていた。車い

すに乗っているのはお母さんだった。そしてその車いすを押している人を見て、ぼくは心臓が止まりそうになった。

「カスミちゃん！」

カスミはただ微笑んでいた。

「ユキちゃん、カスミちゃんのこと、知ってるのかね。この子は本当にいい子でね、しばらく前からボランテアで来てるのよ。」

「そうなの？」

カスミは恥ずかしそうにうなずいた。

「ユキちゃん？」

「お母さん！」

お母さんはぼくに触った。お母さんはサングラスをかけていて、目がよく見えないようだった。

「大きくなったわね、ユキちゃん」

「お母さん、目が見えないの？」

「大丈夫よ。急にこんな明るいところに出て来ると、なかなか目が順応しないの。部屋の中に入ったら大丈夫だから。」

「まり……」

「あなた。待ってたわ。」

お父さんはお母さんの手を取った。お母さんは微笑んだ。

「さあさ、中に入りましょ。こんなところにいつまでもいないで。」

おばあちゃんがぼくたちを急きたてた。みんなが中に入って行った。ぼくは車いすを押すカスミと一緒に歩き、誰にも気づかれないように頭をカスミの肩にこすりつけた。カスミは恥ずかしそうに微笑んだ。

大きなテーブルにみんながついて、お昼御飯になった。カスミはかいがいしくテーブルの準備をした。

「ぼくも手伝うよ。」

「ありがとう。でもお客さんだし。」

「うん。でも手伝いたいんだ。」

「そう。じゃあみんなにスープを配ってね。」

「うん。」

ぼくは厨房に行ってトレイに並べられたスープを持って、一人ひとりのところに並べて行った。みんなで食前の祈りをささげると、楽しい食事になった。

お父さんが何かお母さんに言い、お母さんは少し涙を流したり、笑ったりしながら話している。おばあちゃんはカスミがお気に入りだ。カスミはおばあちゃんの話の一つ一つ反応し、笑い、答え、次の食事の準備をしている。

「よくできた子だねえ。」

おばあちゃんはすっかり感心している。ぼくはなんだから自分が褒められたような、嬉しいような、照れくさいような感じがした。

食後、おばあちゃんは他の入所者の人たちと農

園に行った。お父さんとお母さんは、部屋で話をしている。海に見える食堂の大きなテーブルはがらんとして、ぼくとカスミだけになった。

「いいところだね。」

「うん。」

「お母さんがこういうところにいて、安心した。」

「そうよね。」

「でもカスミちゃん、何でここにいるの？」

「ふふ。」

カスミはちよつと「教えない」という顔をした。

「教えてよ。」

「あの草原の大聖堂の空間で、まりちゃんに聞いたのよ。」

「ええ？」

「つて言いたいところだけど、本当は、えっちゃんに聞いたの。」

「えっちゃんに？」

「あれからユキちゃん、お父さんのことがあったから、私とも会えなくなったじゃない。えっちゃんも学校やめちゃったし、私もどうしたらいいのかなって思っ

てただけど、でもまたユキちゃんに会えるときまで、私もすっかり私らしいことをしなきゃいけないな
って思ったの。ユキちゃん頑張ってるんだしね。」

「大したことないよ。カスミちゃんに会えないことは
さびしかったけどさ。」

「私もさびしかったわよ。ときどき学校帰りに市庁
舎前で、ユキちゃんが新聞売ってるの見に行ったも
の。」

「なあんだ、声をかけてくれればいいのに。」
「だって、一生懸命売ってるのに、邪魔しちや悪い

じゃない。」

「影から見てたの？」

「うん。」

「でも近くにいたんだね。」

「うん。」

「そんな気がしてたんだ。」

「そうなの？」

「うん。市庁舎にいるときも家にいるときも学校にいるときも、ぼく、ずっとカスミの近くにいるような気がしてたんだ。だからさびしかったけど、平気だ

った。」

「そう。」

カスミは少しじんとした表情をして、遠くを見た。

「でね、その帰りに植物園に行ったの。そしたらそこでばったりとえっちゃんに会って。」

「そうなんだ。」

「それでいろいろな話をしたわ。」

「じゃあえっちゃん、子どもが生まれるってことも知ってる？」

カスミは驚いた顔をした。

「ええ？ そうなの？ ふうん。 そうなんだ。」

カスミは嬉しそうな顔をした。

「じゃあ、私に年の離れた妹が生まれるんだな。嬉しい。」

今度はぼくが驚いた。

「ええ？ どういうこと？」

カスミはいたずらっぽく笑った。

「あの植物園の先生ね、本当は私のお父さんなの。」

「ええ？」

今度はぼくがびっくりする番だった。

「ああいう人でしよう。一度研究に夢中になったら鉄砲玉みたいに一月でも二月でも帰って来ない。だからお母さんも愛想を尽かしちやつて追い出しちやつただけどね。」

「じゃあ植物園に行ったとき、話してたのは……」
カスミは首を振った。

「あときは、本当に誰だか分らなかったのよ。子どものころに離れたつきりで、ずっと会ってなかった

から。でもあの日うちに帰ってから、この人どこかで会ったことあるなああって考えてたら、お父さんだったということに気がついたの。」

「変なの。」

「変でしょ。私も変だと思っわ。」

ぼくたちは二人で笑った。

「ねえ、海に行ってみない？」

「うん。」

ぼくたちは食堂のテラスから外に出て、海に向かう芝生の坂道を砂浜に向かって降りて行った。白

い波頭が眩しかった。

渚にて

浜辺には白いベンチが一つ、取り残されたように置いてあつて、そこから先にはずっと白い砂浜が続いていて、誰もいなかった。カスミは赤と白の大きなパラソルを持って、すたすたとぼくの前を歩いて行った。裾の長い白いブラウスに、少し裾の切れたデニムをはいて、白いサンダルをはいていた。髪には軽

くウエーブがかかっている、その髪を無造作に後ろ頭の高いところでまとめていた。ぼくたちはベンチに影ができるようにパラソルを立てて、ベンチに並んで座った。波打ち際に、チドリが二三羽、歩いていた。

「私、誰かの役に立ちたいと思って。」
カスミが話し始めた。

「病気の人、困っている人。誰の、どんなふうにも役に立てるのか分からなかったけど、何かそんな仕事を

したいと思ってたの。だから、どこかに奉仕に行けたらいいなって思ってた。でも、具体的に何をしようか、どうしたらいいか、考えがまとまらなかったの。そうしたら、植物園でえっちゃんに会って。いろいろ話したの。その時に、ユキちゃんのお母さんがこの療養所にいるっていう話を聞いたのよ。」

「そうなんだ。」

「その時私ね、すごく思ったの。誰かの役に立ちたいけど、もし役に立てるなら、まずユキちゃんの役に立ちたいって。だからね、夏のお休みもあるし、それ

に学校ももうひと月くらい休んで、療養所で働かせてもらおうと思って、電話したの。そしたらこの療養所、お母さんのお医者さん仲間の人がやっているところだね、お母さんに言ったら最初は学校休むことにいい顔しなかったのだけど、しづしづ認めてくれた。「あなたの人生なんだから、あなたの信じたようにしなさい」って。」

ぼくは頷いた。

「それで私、急行電車に乗ってこの街に来たの。最初はたいへんだったわ、仕事はきついし、私本当に

何もできないんだなあって思い知らされた。でもこの頃、少し体力がついて来て、だいぶ何でも出来るようになってきたのよ。」

「カスミちゃんきれいなんだし、なに着ても似合うんだし、何かファッション関係の仕事につくのかと思ってた。」

カスミは笑った。

「ふふ。ありがとう。そう言ってくると嬉しいわ。私も服着るの好きだし、いろいろ工夫するのも好きよ。だからね、そういう仕事もいいかもしれない

とも思ってる。今はね、いろいろやってみたいの。今日何の日か、覚えてる？」

「えっと。」

「ひどいわね。」

「あ、カスミの誕生日だ！」

「そうよ。今ごろ思い出して。」

「ごめん。カスミがいるって知ってたら、プレゼント持ってきたのに。」

「気持ちだけでうれしいわ。」

「あのね」

「なに？」

「ぼく、思い切って、ラプラス通りのフランクリン時計店で、プレゼント買ってたんだよ。」

「え？すごい。なに買ってくれたの？」

「なんか実物がないとなー」

「ねえねえ、教えてよ。」

「これ」

ぼくはポケットから小さい箱を出した。カスミは目をぱちくりさせた。

「カスミの誕生日、忘れてりしないよ。それにいつ会

えるか分からないから、ずっと持ち歩いてたんだ。」
カスミは箱を開けた。金のチェーンのついたトパーズのネックレスが太陽の光を反射してキラキラした。

「ありがとう。どうしたの、こんなに高いもの。」

「うん、お父さんの知り合いだからって、月賦にしてくれたんだ。」

「本当？」

「ぼくだって少しくらい、お小遣いためてたしね。カスミちゃんがきれいになってくれると嬉しいから。」

「ありがとう、ごめんね。」

「つけてみてよ。」

「うん。」

カスミはネックレスを白いブラウスの中につけた。金のチェーンの先に小さなトパーズがパラソル越しの太陽に光って、カスミの胸元に眩しかった。

「誕生日おめでとう。」

「ありがとう。」

カスミは急にぼくにキスをした。そしてさっと唇を離して、

「17歳になっちゃった」

と言った。

「ぼくだって、もうすぐ13歳になるよ。」

風が吹き抜けた。

「早く追いついてね。」

「頑張る。」

チドリが鳴いた。

「私、いつの間にか大人になっちゃうから、今のうちにいろいろやって、自分が何をしたらいいのか、考え

たいと思って。私、この仕事も嫌いじゃないと思った。

ユキちゃんのお母さんもおばあちゃんも、最初は気
難しい人たちかなって思ったけど、慣れてきたらだ
んだんうちとけてくれて、おばあちゃんなんかすつか
り私のこと、カスミちゃんカスミちゃんって話しかけ
てくれるの。」

「よかった。」

「まりちゃんとはね、本当は大聖堂の世界で、えっ
ちゃんと三人で聖歌隊にいて、歌を歌っていたの
よ。」

ぼくはどきつとした。

「でもね、まりちゃんはこちらの世界に来たとき、あの世界での記憶はすべてなくしたみたい。えっちゃんも私も、不完全にしか記憶は持ってないんだけど。ユキちゃんはどうか？」

「うーん、何が本当で何が現実でないのか、ちよつと区別がつかない。」

「ユキちゃんは覚えている人ね。でもまりちゃんも、こちらの世界で私のことを知らなくても、どこかで何かつながりを無意識のうちに感じてくれて、だん

だん私に心を開いてくれたの。それでユキちゃんの小さいころの話も聞いたし、お父さんの話も聞いた。お父さんとお母さん、きつとやりなおせるわ。本当はとても心の通い合った人たちだもの。」

「それなら嬉しいな。」

ぼくは深く息をした。

「カスミちゃん。」

「なに？」

「お母さんを助けてくれて、ありがとう。」

「どういたしまして。」

ぼくは、カスミのほっぺたにキスしようとした。カスミはぼくの顔に手をあてて、ぼくの唇を唇に持って行った。

リカ

ぼくたちはパラソルを持って療養所に戻ってきた。午後の休み時間が終わって、人が動き出していた。

「カスミちゃん、ちよつと。」

おばあちゃんが呼んだ。ぼくとカスミがおばあちゃんのところに行くのと、

「カスミちゃん、ちよつと部屋の模様替えをお願いしたいんだけど。」
と言った。

「すぐ行きますね。」

おばあちゃんは目ざとく、カスミの胸元のトパーズに気がついた。

「あら、いいネックレスね。」

「あ、わかりました？」

「恋人にでももらったのかしら。」

「そんな。」

カスミは真っ赤になった。ついでにぼくも茹蛸のよ
うな顔になったに違いない。

「まったく子どものくせに、隅に置けないわね。」

おばあちゃんは大げさにため息をついた。

「でもカスミちゃんじゃ文句言えないわ。私は応援
したげるからね、お父さんお母さんがなんて言っ
ても。」

「おばあちゃん！」

「4つくらいの年の差がなんだ。ユウさんとまりとなんか7歳も離れてるんだからってね。」

「おばあちゃん大声で恥ずかしいよ。」

「あら失礼。」

おばあちゃんは笑った。

「ま、がんばんなさい。ユキちゃん、あなたはちよっとお母さんの部屋に行つといで。」

「うん。じゃあカスミちゃん、あとでね。」

「うん。」

ぼくはおばあちゃんとカスミと別れて、お母さんの部屋に行った。ノックをしても返事がない。寝てるんだらうか。ぼくはドアを開けて中に入った。お母さんはベッドで寝ていた。カーテンは開け放たれて、午後の眩しい光が入って来る。お父さんはソファで眠っていた。ぼくはお母さんの枕元の壁にかかっている絵を見た。本当に何の気なしに。

「リカ……」

そこにいたのは紛れもなく、リカだった。明らかに絵なのに、明らかにリカだった。リカは絵の中で笑

っていた。

「ユキちゃん、やっと会えたね。」

「リカ、どうしてここに。」

「あたしはここにいるよ、ずっと前から。」

「リカは絵だったの？」

「絵でもあるし、絵じゃないとも言えるわね。あなたのところへいっていい？絵の中でしゃべるの、疲れちゃうから。」

「え？」

リカは絵から抜け出ると、ぼくの横に来てぼくの

手を握った。

「ねえユキちゃん、肩車して。」

「でもお父さんもお母さんも寝てるのに。」

「大丈夫、静かにするから。」

ぼくはリカを抱き上げて、肩に乗せた。

「わーい。ユキちゃんなかなか来てくれないから、ずっと絵の中にいさせられたの。カスミちゃんに言ってもユキちゃんが来るまで我慢してね、って言うばかりで。」

「カスミと話ができるの？」

「もちろんよ。」

「カスミってどういう人なの？」

リカはふふふっと笑った。

「それは教えられないわ。ユキちゃんが、一生かけて解いていかなければならない謎なんだから。」

「謎？」

「そうよ。でもこれだけは言える。カスミちゃんはい人よ。」

「それはぼくも知ってる。」

「今までは、カスミちゃんもユキちゃんも、お互いの

いいところばかり見せあつてたし、見ようとしてた。でもこれからはそうはいかないわ。いやなところも、傷つくところもあるかもしれない。でも、ユキちゃんはカスミちゃんを大事にしてね。何があつても。」

「うん…」

「何自信のなさそうな顔してるの？」

「だって、カスミはぼくが子どもだから好きなんだつて言つてた。大人の男になったら好きかどうかかわからないって。」

「ふふ。まだそんなこと心配してるの？」

「だって。」

「でもそうよね。あの子は謎。この子も謎。男と女は謎だらけってね。おばあちゃんにだってからかわれてたしね。」

「まったく油断ならないよ。」

「ねえおろして。」

「うん。」

ぼくはリカを下におろした。

「誰か来るから私、絵に戻るわ。ユキちゃん、いつでも遊びに来てね。私の方から遊びに行くかもしれない」

ないけど。バイバイ！」

リカは走って絵に戻った。何事もなかったかのよう
うに。そしてそれとほとんど同時に、ドアをノックす
る人がいた。

「どうぞ。」

ぼくが言うのと、ドアを開けて一人のかっこいい女
の人が入って来た。太いサングラスをして、金色の
髪をしていた。

「あら、まりちゃん寝てるのかしら。」

「すみません、母は寝ています。」

女の方はサングラスを取った。それは見たことのある人だった。

「いずみさん、ですか？」

女の方はぼくの方を見て言った。

「ああ、半年前にラプラス通りで会った男の子ね。

あなた、まりちゃんの子どもだったんだ。」

「はい。」

「今日はね、ちよつと絵を直そうと思って」

「絵って、あの女の子の絵ですか？」

「そうよ。あの絵、私が描いたの。」

「ええ？」

「驚かなくてもいいじゃない。」

「だって、いずみさん、市役所勤めだって。」

「あなた、何で私のこと……そうか、カスミが付きあつてる男の子って、あなたのこと？」

ぼくは赤くなって下を向いた。

「はい。」

「なんだ、あなたに取られちゃったのか、カスミ。」

「取ったなんてそんな。」

「いいのよ、別に気にしてないから。私、また新しい

人できたし。」

「そうなんですか？」

いずみはぼくをまじまじと見た。

「やっぱりきれいな子ね。カスミが好きになるのも無理ないわ。やっぱショックだけど。」

「今気にしてないって。」

「そういうところに突っ込まなくていいの。まあいいわ。とにかくリカちゃんの絵、しばらく借りてくからね。」

「この子、リカっていう名前なんですか？」

「そうよ。」

「どうして。」

いずみはさつさと絵を外して、手際良く梱包を始めた。その時、お母さんが目を覚ました。

「いずみさん……」

「あ、ごめんまりちゃん。起こしちやっただね。このリカちゃんの絵、もう少し直すから、しばらく持ってくね。」

「ありがとう。白いワンピースもいいけど、ピンクもいいかなって思ってた。」

「ふふ。絵の中の女の子を着替えさせるなんて、普通思いつかないわ。まりちゃんらしくて素敵よ。」

「私の夢の中に出て来るリカが、今度はピンクの服が着たいっていうもんだから。」

「お母さん。」

「なあにユキちゃん。」

「この絵の中の子は、お母さんの夢の中に出てくる子なの？」

「そうなのよ。それをいずみさんに描いてもらったの。」

「そうなんだ。」

「そういうわけ。リカちゃんの絵を描くいずみちゃん、
ってわけよ。じゃあカスミによろしくね。あ、そうそ
う。ちよつとこっちに来て。」

「？」

ぼくはドアのところにいるいずみのところに行った。
いずみはぼくに小さく耳打ちした。

「私の新しい恋人って、カスミのママなの。」

「ええ？」

「カスミには内緒よ。」

いずみはいたずらっぽく笑った。

「じゃあねまりちゃん。」

「よろしくねいずみちゃん。」

梱包してあるのに、その梱包の中からリカの声が聞こえた気がした。

「ユキちゃん、また来てね。」

秘密の草原

ぼくは大聖堂の中学校に通い始めた。ぼくは新

聞配達をやめて、本格的にラジオを作り始めた。ぼくのラジオはなぜか音がいいと評判で、音楽ホルや学校からも作ってくれと頼まれるようになった。お父さんは仕事に戻り、大きな掛け時計や置時計を作ったり直したりするようになった。お母さんも家に戻り、ご飯を作ったり買い物に出かけたりするようになった。お母さんの部屋には、リカの絵が飾られていた。誰もいないとき、ぼくはリカと風船で大聖堂のトンがり屋根に飛んで行って、十字架に腰掛けて妖精や魔法使いの話をしたりした。

えっちゃんには子どもが生まれた。ぼくとカスミはときどき植物園に会いに行った。小さいころから植物が好きで、先生は一生懸命植物の名前を教えるようにした。カスミはそれを見て懐かしそうな顔をして、言葉も分からないうちから花が好きだったのはお父さんのせいだったんだな、と笑った。カスミはお父さんに打ち解けて、落ち着ける場所がもう一つ出来たような気がする、とぼくに言った。

カスミは学校に通いながら服飾の勉強を始めて、放課後に裁縫学校に通いはじめた。土日も忙しくて会えないけど、裁縫学校が休みの木曜日に、いつもぼくたちは会った。いずみとカスミのお母さんのことはやがてカスミも知ることになったけど、

「ヒドイわよね。お父さんを追い出した後、もう男はこりごりだ、とは言ってたけど。」
と言いながら、カスミはどこか嬉しそうにも見えた。

春の近くなつた木曜日、ぼくとカスミはエリオットの丘に上り、あの草原を散歩した。二人の秘密が生まれた、あの草原を。

ぼくはカスミに、ずっと気になっていたことを聞いた。

「カスミ。」

「何？」

「今でもぼくのこと、好き？」

カスミは少し驚いた顔をした。

「どうして？」

「だって、ぼくのこと、子どもだから好きだって言っ
てたじゃない。ぼくはもう、子どもじゃなくなりかけ
てる。だから、カスミは本当はどう思ってるのかな、
とって。」

カスミは笑った。

「そうね、そんなこと言ってたこともあったわね。」
風が駆け抜けて、ヒースが揺れた。

「私、分かったわ。」

「何が？」

「あなたにそんなこと言ったのはなぜかって。」

「どういうこと？」

「私、本当はね、怖かったの。こんなことずっと続くわけがない、ずっとお互いが好きでいられるなんて、幻だって、思い込もうとしていたの。最初は好きでも、だんだんお互いが見えてくるにしたがって、好きただけではいられなくなるって。」

「カスミ……」

「でもね、本当は、最初からずっと、今でもずっと、あなたのことが好きなの。そんなこと、本当は分かっていたの。最初に会ったときから、他の人とは何か

違っていた。あなたは子どもだから、男の子だから、だから違うって感じるだけだって思おうとしていた。でもそうじゃない。自分の気持ちを確かめれば確かめるほど、あなたが好きな自分に気がつく。気がついて、心の底がほんのりと温かくなって、そして怖くなる。本当に自信がなかったのは自分自身のことだった。私、あなたが私のこと好きじゃなくなったらどうしようと思って、その方が怖かったのよ。」

「そんな…」

「あなたは素敵よ。子どもでも男の子でも。大人の

男になっても、私、ずっとあなたのことが好きよ。たとえあなたが私のことを嫌いになっても。」

カスミは涙ぐんだ。

「嫌いになんかならないよ。」

「ごめんね、変なこと言っで。でもね、私、決めたの。」

また風が吹いた。

「ずっとずっと、あなたのことを好きでいる。あなたのことを信じている。あなたとずっと一緒にいるって。」

「カスミちゃん…」

カスミは笑った。

「約束、忘れた？」

「あ…」

「ちゃんをつけたら、アクアマリンのピアスを買って
くれるって。」

「しまった…」

「いいのよ。」

カスミはぼくを抱きしめた。

「ずっとずっとあなたという。それだけで十分だか

ら。」

「カスミ……」

「ありがとう。」

草原を風が駆け抜けた。ふんわりした夢を見る唇と唇の向こうに、トパーズが太陽にきらめいていた。

大聖堂のある街で 第10話 海辺の白い療養所で

<http://p.booklog.jp/book/45978>

著者：堀田耕介

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kous37/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45978>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/45978>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.